

自然種論から見た生物種と相同をめぐる問題

植原亮（関西大学）

自然種（natural kind）に関するひとつの有力な見解は、自然種を恒常的性質群（homeostatic property cluster）として捉える見方（HPC説）であり、R・N・ボイドのような論者を中心に理論的整備が進められてきた。HPC説は、生物種（species）をめぐる問題への対処を通じて、古典的な本質主義的自然種観に大きく修正を加えることで登場してきた見解である。本発表では、このHPC説がいわゆる種問題（species problem）にどのように対処するかを論じながらその大枠と意義を示したうえで、この見解を背景にして、近年活発になっている相同（homology）をめぐる議論に、私なりの観点から検討を加えることを目標とする。

種問題においては、生物種を自然種として捉える自然種説（種類説）と、それ自体がひとつの生物個体と同じような個体であるとする個体説（個物説）とが対立してきた。HPC説は、一見したところ、これらふたつの代表的な見解のうち、個体説（個物説）を斥け、自然種説（種類説）のみを採用するものであるように見えるかもしれない。しかし、実際のところHPC説は、少なくとも生物種の扱いをめぐる限定された範囲では、これらふたつの説の理論的な優劣に関して決定的な裁定を下すわけではない。むしろHPC説を生物種に適用するポイントは、個体説が強調する生物種の特徴をうまく包摂するような自然種説を構想しようという点にある。そして、HPC説のこうした構想は、個体と種との存在論的相違を絶対的なものではなく、連続的なものとして捉える見方に結びつくものである（しかしこのような見解に立った場合でも、自然種と名目的対象ないし規約種との間には截然とした相違を認めることができる）。本提題では以上の点を整理したうえで、I・ブリガンドなど種問題におけるHPC説論者の近年の議論も検討したい。

相同物の種としての同一性をめぐる議論では、これまで共通祖先に由来するという点に同一性の基準を求めるのが主要な見解であった。これに対し、生物学の哲学における近年の文献では、相同物をむしろ相似物（analogy）などの機能種（functional kind）と連続的なものとして位置づけるべきだとする見解が、やはりブリガンドらによって提出されている。確かにHPC説に立つのであれば、多型実現可能性を備えた機能種であることは、それが自然種であるという理解を妨げるものではない。しかしそれでは、相同物とは正確なところいかなる存在論的身分をもつものなのか、また自然種として捉えられうる他の対象とはどのように異なるのか、といった点があらためて問われねばなくなるだろう。なるほど相同物には生物種に見られるような個体的な特徴を見出すことが難しいが、だからといって典型的な機能種と同程度の理論的な統一性しかもたないものとして捉えねばなくなるわけではないようにも思われる。こうして、相同物をもっと存在論的に精細な仕方捉えるための道具立てが必要になる。本発表では最後にこの課題について検討したい。